

合コンにおけるフットィング (footing) の実践

宿利由希子

従来、コミュニケーションにおける様々な性差の存在が報告されてきた。例えば、話題を決定する、多く話す、話を遮る、笑いを取るといった発話の主導権は、女性に比べ男性が握る傾向にあること、一方女性は、相づちや質問で相手の発話を促したり、相手の話を聞いて笑ったりして、相手に同調する言動が多いことなどが指摘されている (Maltz & Borker 1982; Tannen 1990 他)。日本語に関する研究においても、相手の発話に対する相づちは男性に比べ女性が多く、また「男性が笑わせ、女性が笑う」という認識が一般的であるとされる (上野 2003; 大島 2006; 辻本 2007)。では、これらの傾向と異なる男性／女性、すなわち相づちや笑いといった同調的言動の多い男性や、笑いを取る女性は、コミュニケーションの参加者たちにどのように評価されるのであろうか。

このような疑問を背景に、本研究は、合同コンパ (以下、合コン) における会話の相づちと笑いに注目し、合コン参加者たちによるフットィング (footing) の実践を示すことを目指す。フットィングとは、ある場面における、話し手と聞き手の距離感や立ち位置のとり方を意味するものであり (Goffman 1981)、行為者が何者として関わり扱われるかを示す。行為者が他の参加者たちに何者として扱われるのかというフットィングを観察することにより、行為者に対する参加者たちの評価を推測できると考えた。

まず、日本語母語話者の男性3名 (M1、M2、M3)、女性3名 (F1、F2、F3) による合コン場面をICレコーダーとビデオカメラを用いて約150分収録した。次に、収録データのトランスクリプトから、相づちと笑い、笑わせの回数を調べた。相づちは、「話し手が発話権を行使している間に聞き手

が送る短い表現（メイナード 1993：58）」とし、質問や依頼に対する応答としての「はい」や「ええ」など、またうなずきや笑いといった非言語行動は回数に入れなかった。笑いは、声をたてるものとたてないものに分けられる（笹川 1997）が、本研究では前者のみを扱った。意図的か否かに関わらず、聞き手の反応として笑うことを「笑い」、また話し手の発話によって聞き手の笑いが生じたとき、その発話を「笑わせ」とした。2名以上のかけあいによって笑いが生じた場合は、かけあいに参加した者それぞれの笑わせの回数として数えた。

調査の結果、相づちと笑いの回数が最も多かったのは最年少の男性 M2 であること、また笑わせの回数は F2 が最も多く、ついで F1 が多かった。これらの結果は、先行研究により指摘されてきたコミュニケーションにおける性差の諸相とは異なるものである。では、M2 や F1、F2 を他の参加者はどのように評価しているのか。

合コンの参加者たちは、相づち・笑いという同調的言動の多い男性 M2 を「営業さん」、笑わせる女性 F1（と F3）を「ボケ」、F2 を「ツッコミ」と呼んでいた。まず前者について、M2 が同じ趣味を持つお客さんに見せるために写真を撮るといった話をした際、複数の参加者が M2 を「営業さん」と呼びその行動を褒めた。M2 もその指摘に納得し、受け入れていた。後者について、F1 のボケに F2 がツッコミを入れた際、M2 が女性 3 名の関係性を「ボケ（F1）・ボケ（F3）・ツッコミ（F2）」であると指摘した。M2 の発言以降、F1・F2・F3 の笑わせが増え、反対に男性たちの笑わせが減り、笑いが増えたことから、「ボケ・ボケ・ツッコミ」というフッティングが、指摘された女性たちだけでなく参加者全体に肯定的に受け入れられ、実践が促進されたことが見て取れた。

観察された「営業さん」「ボケ」「ツッコミ」は、「ボケる」などの言語行動自体や「ツッコむ役」といった役割とは異なる、「キャラ」と考えると考えることができる。キャラとは、「スタイル以上、人格未満」の人物像（定延 2011）、ステレオタイプ的なイメージである。「ボケキャラ」「オヤジキャラ」など、キャラの種類は多く、日本の若者は多様なキャラによって親密な関係を築こうとする傾向があることが報告されている（瀬沼 2007）。本調査においても、

一般的に男性／女性に見られるとされる傾向とは異なる言動をする行為者は、一般的な傾向とは異なる男性／女性としてではなく、多様なキャラによってフットィングされていた。結果的に、合コンは終始和やかなムードで執り行われた。

以上の観察から、合コン参加者たちが、性差によるフットィングではなく、より細分化したキャラによるフットィングを行っていることが明らかになった。ただし、本調査は合コン一回分の会話データ及び観察による分析であるため、断定的なことは言えない。今後、他の参加者による合コンでの会話データをより多く収集し、分析を行う必要があるだろう。

[参考文献]

- 上野行良 (2003) 『ライブラリ パーソナリティ 3 ユーモアの心理学 — 人間関係とパーソナリティ —』, サイエンス社.
- 大島希巳江 (2006) 『日本の笑いと世界のユーモア』, 世界思想社.
- 笹川洋子 (1997) 「儀礼行為としての「笑い」: 電話会話にみられる笑いを手がかりとして」, 『親和国文』, 32, pp. 84-109.
- 定延利之 (2011) 『日本語社会のぞきキャラくり』, 三省堂.
- 瀬沼文彰 (2007) 『キャラ論』, STUDIO CELLO.
- 辻本桜子 (2007) 「あいづちの男女差に関する一考察 — トーク番組における司会者のあいづちを通して —」, 『日本言語文化研究』, 11, pp. 33-45.
- メイナード K 泉子 (1993) 『会話分析』, くろしお出版.
- Goffman, E. (1981) *Forms of talk*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Maltz, D. & Borker, R. (1982) A Cultural Approach to Male-Female Communication. In Gumperz, J. (ed.) *Language and social identity*, Cambridge University Press, Cambridge, pp. 196-216.
- Tannen, D. (1990) *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*, Morrow, New York. [田丸美寿々 (訳) (1992) 『わかりあえない理由』, 講談社.]

(しゅくり ゆきこ・神戸大学大学院国際文化学研究科博士課程)